

与謝野鉄幹と漢詩

——『明星』第二次時代の漢詩人 與謝野 寛——

鉄幹の漢詩の作品の再公表には、約三十五年ほどの空白の時期がある。『海内詩媒』の最後の投稿漢詩は、「瓶井山雜吟之一」と題した五言絶句の詩であり、明治二十二年（六月十二日発行1889）、鉄幹十六歳の時であった。

『海内詩媒』への漢詩投稿の際の鉄幹は終始一貫して「安藤寛」の名を使っていた。二度と再び養家先の安養寺に戻ることはなかったが、正式な戸籍離脱までは「安藤寛」で通していた。鉄幹の名は明治二十三年（1890）五月、西本願寺で得度して法号「礼讓」を受け、九月に次兄赤松照幢が住職をしていた徳応寺の機関誌に「鉄幹」の署名を使い十年以上使い続けたが、明治三十六年（1903）に師の落合直文が亡くなった翌年から鉄幹の号を廃し、與謝野寛を使うようになった。

以前にも述べたが、明治三十三（1900）年四月から明治四十一年（1908）十一月まで八年間にわたり発行された『明星』に鉄幹は漢詩を一首も掲載していない。百号を数え自らが主宰する雑誌に全くただの一首も載せなかったのは、おそらく何らかの理由があったのだろうが、あれだけ一時期熱中した漢詩を三十年以上制作の対象とせず、むしろ封印してしまったかのような印象さえ残る。明治二十一年（1888・十五歳）当時に岡山中学の入試に失敗したとき漢詩に没頭しすぎて受験勉強がおろそかになったことを最大の原因と考えて、漢詩制作の抛棄というか漢詩との決別を自らの心に期したようではあった。それに

西村 富美子

しても三十五年もの間の沈黙を破って再び漢詩を制作し、第二次『明星』に掲載する、自身の作品として公開に踏み切ったのはなぜだろうか。ただ社会的に公表はしなかったが詩作は密かに続けていたようである。残っている作品も多少ありその面の調査は今後の課題かと思われる。

こうした幾つかの疑問を残しつつ発表を始めた「漢詩」の作品であるにもかかわらず、掲載の方法また作品の内容に疑問を感じさせるものがある。本稿では再公表を始めた鉄幹の漢詩の紹介と内容について言及したいと思う。

○

『明星』終刊から十三年後に所謂第二次『明星』が復刊され、大正十年（1921）十一月から昭和二年（1927）四月まで六年間ほど発行されるが、最初の『明星』ほどの華やかさも勢いもなく何よりも時代の変化もあって第十巻・第二号（四十八冊）をもって終刊となる。

ただ第二次の同人も、かつてと同じくそうそうたる顔ぶれであり、芥川龍之介、有島武郎・生馬兄弟、石井柏亭、梅原龍三郎、奥野信太郎、尾崎弴堂、小山内薫、中原綾子、厨川白村、小島政一郎、今東光、佐藤春夫、鈴木三重吉、高浜虚子、高村光太郎、高安やす子、竹友藻風、東郷青児、永井荷風、日夏耿之介、平野萬里、堀口大學、柳宗悦、山田孝雄、吉田精一、吉田増蔵、吉野作造、吉村冬彦、渡邊湖畔、深尾須磨子など枚挙に遑が無いほどであり、かつて新詩社を脱退した北

与謝野鉄幹と漢詩

原白秋、吉井勇、木下李太郎なども名を列ね、またかつての『明星』同人とも重なり合っている。第二次『明星』は森鷗外を中心として、高村光太郎、永井荷風、石井柏亭、堀口大聖などの強力な後押しで復刊したのだが、何よりも鉄幹自身の精神的気力の低迷があり以前と同じほどの情熱を無くしていたことが続行不可能の主たる一因ではなかったのだろうか。

この第二次『明星』に、鉄幹は自作の漢詩を掲載する。発行した計四十八冊のうちの四冊に五十首の漢詩が見えている。ただその掲載の方法は特殊であり、「雑俎」という項目つまり『明星』の正式原稿という形ではない扱いなのである。正当な原稿の座を占めない位置で載せている。主宰者としての遠慮からか、作品に対する自己の評価からなのかその理由は不明だが、ともあれ鉄幹の漢詩が久々に登場したのである。またこれを機に、鉄幹の漢詩制作が復活するきっかけにもなっている。言い換えれば五十歳代の漢詩の作品の再出発が第一次『明星』であり、以後十年ほどにわたって継続していく。かなり気をつけないとうっかり見落としてしまいそうだが、注意してみれば逆に鉄幹の真意が感じ取れるようにも思う。

第二次『明星』から開始された鉄幹の漢詩制作は、次には満州蒙古旅行中の産物である「満蒙遊草」、さらに第二次『明星』終刊後、昭和五年(1930)から創刊された『冬柏』所載の漢詩へと、目立たない形で脈々と作られ発表され続けていく。本稿では、先に述べたように、三十五年ぶりの鉄幹の漢詩、第二次『明星』の五十首を取りあげることにし、その理由は後日に明らかにしたい。

まず第二次『明星』掲載の漢詩五十首の巻・号数、発行時期を挙げておく。

- (一) 第六巻・第三号(大正十四年三月発行) 1925年 五十二歳
「采花莊雜詩」 十七首
(二) 第七巻・第三号(大正十四年九月発行) 1925年 五十二歳

「采花莊雜詩」 四首

(三) 第九巻・第三号(大正十五年十月発行) 1926年 五十三歳

「遙青書屋雜詩」 九首

(四) 第十巻・第二号(昭和二年四月発行) 1927年 五十四歳

「遙青書屋雜詩」 二十首

以上の四冊の「雑俎」の項目に見える。

それぞれの詩群の前に「采花莊雜詩」・「遙青書屋雜詩」という「前題」が付されている。「采花莊」は大正十三年に下荻窪に建てた与謝野夫妻の仕事場、読書室であり、「遙青書屋」はその翌年か翌々年に「采花莊」の庭に建てた書斎で、秩父連山、富士山、甲州の山山、箱根山脈までが遠望できるので、名づけたという。

また「采花莊」については、(二)の一八の詩題に、

頃者予城西の下荻窪に地を借りて、一茅屋を営み、扁に采花莊と曰う。莊に庭園の趣無く、唯だ雑草の繁蕪するに任す。而して月に兩三度閒に乗じて往く。往けば則ち読書し、倦めば則ち歌を詠み、朝より夕べに至るまで、憐然として身は風塵の表に在り、意興会うところ、偶たま此の作有り。

あくまで子どもたちのために建てたもので、月に二三度暇なときに訪れ、読書したり歌を詠んだりして、朝から夕方までのんびりと過ごし、気分と興趣がうまく合いたまたまこの詩を作ったのだ、という。当時与謝野夫妻には十一人の子どもがいた。(五男・六女)

また「遙青書屋」についても、(三)の二三の詩題に、

予曩に地を郊西に卜し、小居を営む。扁して采花莊と曰う。頃者復た一楼を其の側に構う。題して遙青書屋と曰う。西南に、甲・武・相・の三州の諸山を遠望するを以てなり。

と説明をしている。

先に挙げた第二次『明星』の(一)・(二)・(三)・(四)の四冊に見

える鉄幹の詩には連作の詩が多い。

たとえば、(一)の十七首、一・二・三は堀口大學の父、堀口長城に次韻した詩。四・五・六は南信州に旅行したときの作。七・八は新潟の宴席での詩。一二・一三は渡邊湖畔への和韻の詩である。

また(四)の二十首などを見ると、三一〜四三までの十三首は、久方ぶりに訪れたこの書屋で梅花の二分咲きを観ての連作、四五・四六・四七・四八・四九の五首は、若槻(礼次郎)総理が職を辞する話を聞いて呈上したもので、(四)の二十首などは大半がこうした連作の詩であり、いずれも五言絶句で心に思い浮かぶままを詩の形に詠んだのであろう。

これらの五十首の詩をみると、『明星』復刊後、当時の與謝野夫妻の文学活動の拠点でもあり私生活の拠点でもあった『采花莊』・『遙青書屋』、と当時の文学(漢詩)を通じての交流相手、堀口長城、渡邊湖畔、吉田學軒の三人の人物の存在が鉄幹の漢詩制作の重要なポイントであったように考えられる。

前者の制作の『場』と、後者の制作対象『人物』の二点を視点として、これら五十首の詩について考えてみようと思う。先ず『場』、次に『人物』の順で述べる。

I 「采花莊」「遙青書屋」関係

頃者予借地于城西下荻窪、營一茅屋、扁曰采花莊。莊無庭園之趣、唯任雜草繁蕪。而月兩三度乘閒而往。往則讀書、倦則詠歌、從朝至夕、悠然身在風塵之表、意興所會、偶有此作。(訓読は省略)

天地一枝筆 老來無所羈 浮名眼中盡 嘯詠自怡怡 (二)一八

天地一枝の筆、老來羈ぐ所無し

浮名眼中に尽き、嘯詠自ずから怡怡たり

山妻又識字 唱和擒新辭 二兒入大學 餘兄各就師

山妻 又字を識り、唱和 新辭を擒う。

二兒は大學に入り、余兄は各おの師に就く

与謝野鉄幹と漢詩

全家有餘樂 清貧不自知 偶出都門去 小婢抱卷隨

全家 余樂有りて、清貧 自ずから知らず

偶たま都門を出で去るに、小婢 卷を抱きて隨う

城西三里許 瀟洒一茅茨 小扉傍野徑 疎竹纔成籬

城西の三里許り、瀟洒なる一茅茨

小扉 野徑に傍い、疎竹 纔に籬を成す

草長不肯刈 衆翠透簾帷 吾年五十二 辛勤得如斯

草長ずるも肯えて刈らず、衆翠簾帷を透る

吾が年 五十二、辛勤 斯くの如きを得

何患軒楹小 方丈納須彌 俯仰一千歲 漫想韓退之

何ぞ軒楹の小なるを患わん、方丈には須彌を納む

俯仰 一千歲、漫に韓退之を想う

悠然披衣坐 凭几獨支頤 默默對書卷 如啞又如痴

悠然として 衣を披きて坐り、几に凭れて独り頤を支う

默默として書卷に對し、啞の如く又痴の如し

渴飲一杯水 快煙時一吹 占斷靜中趣 不省夏日移

渴すれば一杯の水を飲み、快煙 時に一たび吹かす

占斷 靜中の趣、夏日の移るを省みず

衣上忽生白 一痕涼月窺 清麗翻稀露 點我讀殘詩

衣上 忽ち白を生じ、一痕 涼月窺う

清麗 稀露翻り、我が殘詩を讀むに点ず

小婢執燭進 云迨夜時餐 行廚自以薦 携得自遠而

小婢 燭を執り進みて、云う 夜時の餐に迫ると

厨に行きて自ら以て薦め、遠くよりして携え得て

搏飯三四顆 蔬菜以爲宜 苦茶煮方熟 足以忘吾飢

飯を搏めること 三四顆、蔬菜以て宜し

苦茶 煮て方に熟す、以て吾が飢えを忘るるに足る

回頭背壁影 稜稜瘦肩欹 嗚呼影乎影 與汝共戲嬉

与謝野鉄幹と漢詩

頭を回らせば壁に背く影、稜稜として瘦肩せうけん歛しんつ

嗚呼 影よ影、汝と共に戯嬉しげせん

高出風塵表 何物繫我思 一笑軒冕客 康衢疲奔馳

高く風塵の表に出で、何物か我が思いを繋がん

一笑す 軒冕けんべんの客、康衢こうく 奔馳ほんちに疲る

食畢園中歩 數畝我所治 便摘數莖菜 欲向細君遺

食べ畢りて園中を歩み、數畝は我が治する所

便ち數莖の菜を摘み、細君に遺らんと欲す

清興杳不盡 自忘歸去遲 俄被小婢促 蹣跚詠而歸

清興 杳として尽きず、自ずから歸去の遲きを忘る

俄に小婢に促され、蹣跚まんさん 詠みて歸る

悠悠塵中士 清福似我誰

悠悠たり 塵中の士、清福 我 誰に似たるか

五言古詩の非常に長い詩だが、年齢五十二歳（大正十四年1925）の

鉄幹の当時の妻晶子、十一人の子どもたちとの家庭生活が実に微細に

述べられておりささやかながら幸福な環境にあったことを感じさせも

のがあり、さながら陶淵明の「帰去來の辞」を連想させる一種の閒適

詩の趣がある。偶数句に押韻し、上平四・支の韻で、一韻到底。

この詩は、第七卷・第三号（大正十四年九月号）に掲載された四首

の第一首の詩であり、第二次『明星』に掲載せる三首の五言古詩の中で

最も長篇の詩である。

次に『遙青書屋』に関する詩だが、十八首ほどある。

郊西移居三首 用湖畔詩韻。丙寅初秋作

郊の西に居を移す三首 湖畔の詩韻を用う。丙寅、初秋の作

ト宅西郊住 門前車馬無 遙山爭送碧 高屋獨抗朱 (三)一二三

宅を西郊にトし、門前に車馬無し

遙山 争いて碧を送り、高屋 独り朱を抗げる

筆帶秋心勁 筵從野徑迂 園疏充晚食 搔首歎吾愚

筆は秋心の勁を帯ぶ、筵は野徑に従りて迂る

園疏は晚食に充て、首を搔きて我が愚を歎く

獨坐西樓上 秋晴雲影無 窓銜暮山紫 簾映夕陽朱 (三)一二四

獨り西樓の上に坐し、秋晴れて雲影無し

窓は暮山の紫を銜み、簾は夕陽の朱に映ず

書到人如近 夢飛途不迂①優遊應待老 此裏納吾愚

書は人近きがごとくに到る、夢は飛んで途迂らず

優遊 応に老いを待つべし、此裏に我が愚を納めん

田園閑富貴 市隱似吾無 茄面何憎紫 瓜心偏愛朱 (三)一二五

田園 富貴を閑き、市隱 吾が無に似たり

茄面 何ぞ紫を憎む、瓜心 偏に朱を愛す

著書笑嵒懶 學圃逐樊迂 元亮同高興 悠然守大愚

書を著して嵒の懶を笑い、學圃 攀の迂れるを逐う

元亮 高興を同じくし、悠然として大愚を守る

①自注：湖畔佐渡に住み、近ごろ再三書を寄す

この五言律詩三首連作の詩は、新潟県佐渡在住の渡邊湖畔の贈詩に

答えたもので、「丙寅初秋」即ち大正十五年（1926）秋の作であり、

省略した詩題に「西の郊外に小居を建て、采花莊と名づけ、また最近

その側に一樓を建て遙青書屋と名づけた」と述べ、命名の由来を明

かしている。二三・二四・二五の三首とも偶数句に押韻し、韻は上平

七・虞。

次の二七の詩は、この書屋において『明星』の同人たちの歌会が催

されたようすが述べられている。詩中に「銀河」「草虫階下に鳴く」

の語があるので、前詩（二三）（二五）と同じく季節は秋であり、詩型

は五言律詩である。

遙青書屋小集 (三)一二七

銀河流樹抄 涼燭照樓明 良夜共茲會 佳篇多偶成

銀河 樹抄に流れ、涼燭 樓を照らして明らかなり

良夜 共に茲に会い、佳篇 多く偶たま成る

主人生素髮 諸客尚紅情 露氣吹殘醉 草蟲階下鳴

主人 素髮を生じ、諸客 紅情を尚ぶ

露氣 殘醉を吹き、草蟲 階下に鳴く

「主人」は鉄幹、「諸客」は当日の参会者たち、「素髮」は白髮頭の鉄幹、「紅情」は参集した歌人達の熱く紅潮した心情、を表現している。偶数句に押韻し、韻は下平八・庚である。

次の詩も、先の二三〜二五の三首と同じく渡邊湖畔が寄せた詩の韻を用いて作った口占(くちずさみ)の五言律詩である。

書屋口占 用湖畔所寄韻

(二)一七八

書屋口占 湖畔寄する所の韻を用う

郊居金氣遍 雨後轉清冷 野服菊同白 秋繁竹共青

郊居 金氣遍し、雨後 転た清冷

野服 菊同に白し、秋繁 竹共に青し

讀書茲有室 望嶽欲名亭 唱和詞人贈 新篇燦似星

書を読む 茲に室有り、岳を望み亭に名づけんと欲す

唱和して詞人に贈る、新篇 燦として星に似たり

詩の中に、「金氣」、「菊」の語が見えるので、やはり季節は秋であり、五・六句の頸聯にも「書を読む 茲に室有り、岳を望み亭に名づけんと欲す」と、《遥青書屋》命名の由来を詠んでいる。末句の「新篇 燦として星に似たり」の句は、「明星」を意識したもののか。偶数句に押韻し、韻は下平九・青。

以上の五首は、第九卷・第三号(大正十五年十月号288)に掲載された九首の中の五首であり、四首が渡邊湖畔の詩に対する次(和)韻の詩である。それぞれ作詩の規則は遵守し、日常周辺のことを詠んでいる。

次に挙げるのは、この書屋での五言絶句十三首連作の詩であるが、十二月以来、文筆稼業が多忙でなかなか訪れることができなかったが、

与謝野鉄幹と漢詩

久しぶりに訪れ宿泊した際、降雪の後で月のいろも冴え庭先の梅花が二分咲きなのを愛でた詩である。白梅の花を観賞し香りをかぎ、「追攏」(節分)の夕べに子どもたちが豆まきに興ずるようすを描写している。

余客臘來、以筆耕太忙、久不經過、此日來宿、書屋雪後、庭前梅花、開・二分、月色清妍、轉覺可愛、

余客臘來、筆耕太忙しきを以て、久しく經過せず。此の日来たりて宿す。書屋雪の後にして、庭前の梅花、開くこと既に二分、月色清妍、転た愛す可きを覺ゆ、

一 (四)一三一

庭樹蕭疎立 雪平野似湖 凍雲微擁日 點得一團朱

庭樹 蕭疎として立ち、雪は平らにして野は湖に似たり

凍雲微にして日を擁し、一団の朱を点じ得たり

二 (四)一三二

四隣人寂寥 似向山中宿 孤負月明多 窓前不種竹

四隣 人は寂寥、山に向いて宿るに似たり

月明の多きに孤負し、窓前に竹を植えず

三 (四)一三三

吾愚吾自知 窮達亦奚疑 獨對梅花白 春風誦古詩

我が愚なること吾自ら知る、窮達亦た奚んぞ疑わん

獨り梅花の白きに対して、春風に古詩を誦す

四 (四)一三四

咀嚼有餘甘 詩同禪味徹 朱絃時一彈 照有窓前雪

咀嚼して余甘有り、詩は禪味の徹に同じ

朱絃 時に一彈、窓前の雪を照らす有り

五 (四)一三五

勁堅鐵作幹 皎潔雪成花 願嗅一枝馥 終生讀南華

勁堅なること 鉄 幹と作り、皎潔なること 雪 花と成る

与謝野鉄幹と漢詩

願わくは一枝の馥るを嗅ぎ、終生 南華を読むことを

六

(四)一三六

百年須臾耳 榮辱又何云 獨立蒼天下 悠悠送白雲

百年 須臾なるのみ、榮辱 又た何をか云わん

独り 蒼天の下に立ちて、悠悠として白雲を送る

七

(四)一三七

殘雪照窗白 諸兄共誦歌 野翁讀方倦 凭几嗅梅花

殘雪 窓を照らして白し、諸兄 共に歌を誦す

野翁 讀みて方に倦み、几に凭れて 梅花を嗅ぐ

八

(四)一三八

郊居何寂寞 經過古人稀 獨伴梅花影 嫦娥入素帷

郊居 何ぞ寂寞、經過の古人稀なり

独り 梅花の影を伴い、嫦娥 素帷に入る

九

(四)一三九

春來不出郊 偶到主如客 孤坐嗅寒梅 疎枝數點白

春來たるも郊に出でず、偶たま主の客の如く到り

孤坐して寒梅を嗅ぐに、疎枝 數点白し

十

(四)一四〇

一心藏衆妙 萬法固多岐 有變無生死 莊周作蝶飛

一心 衆妙を蔵し、万法 固より多岐

變有るも生死無く、莊周 蝶と作りて飛ぶ

十一

(四)一四一

追攤當今夕 童兒撒豆呼 阿爺方在室 誤勿打頭顱

追攤當に今夕なるべし、童兒 豆を撒きて呼ぶ

阿爺 方に室に在り、誤りて頭顱を打つ勿れ

十二

(四)一四二

吾愛女蔓蘿 纏絹向壁攀 婉柔遂其性 不似主人頑

吾は女の蔓蘿を愛す、絹を纏いて壁に向かいて攀る

婉柔其の性を遂て、主人の頑なるに似ず

十三(用渡邊湖畔君所寄春日偶成一首韻)

(渡邊湖畔君寄する所の「春日偶たま成る一首」の韻を用う)

遙山天末碧 野濶一川橫 雪後多春意 雲從麥畝生 (四)一四三

遙山 天末に碧く、野は濶くして一川横たわる

雪後 春意多く、雲は麦畝從り生ず

この三二、四三までの詩は、第十卷・第二号(昭和二年四月号1927)に掲載の二十首の中の十三首である。中に「南華經」「嫦娥」「莊周」「蝶と作りて飛ぶ」「追攤」などの詩語が見え、脱俗閑適の趣を感じさせながら目前の二分咲きの梅花を賞翫し、子どもたちが豆まきに興じる姿を詠むなど、即興的な五言絶句十三首である。昭和元年(1926)の節分の日の作で、第二次『明星』の五十首の詩の中では佳作と評価すべきであろう。なお、五の詩に見える「鉄幹」は、梅の幹のこと。

韻は、三三の詩が一句にも押韻する以外は、規則どおり偶数句に押韻する。韻は、三一：上平七・虞。三三：入声一・屋。三三：上平四・支。三四：入声九・屑。三五：下平六・麻。三六：上平十二・文。三七：下平六・麻。三八：上平五・微(二句)、上平四・支。三九：入声十一・陌。四〇：上平四・支(一句)、上平五・微。四一：上平七・虞。四二：上平十五・刪。四三：下平八・庚。押韻の字の種類は多いが、平声それも上平に集中し、上声・去声の韻字は用いていない。押韻の面から鉄幹の詩の特徴を考えてみる事が可能かも知れない。

以上で、「場」としての《采花莊》《遙青書屋》関係の詩についての論述は終え、次に《人物》関係のことに言及したい。

○

第二次『明星』の鉄幹の漢詩で、特定の人物との関係が重要な要素になっているように考えられる。その人物とは先に述べたように、

I 堀口長城 II 渡邊湖畔 III 吉田學軒

の三人である。これらの人物を順を追って述べることにしたい。

I 堀口長城 (一)一・二・三

本名、堀口九萬一、日本で最初の外交官である。鉄幹とは特別親密な関係にあったようだが、『明星』その他鉄幹の主宰した雑誌の同人ではなかった。漢詩の作家であり、三百首以上の作品が残されているという。息子の堀口大學は鉄幹の弟子であり、『スバル』『我等』以来第二次『明星』の主要なメンバーであったが、父の死後遺稿を編纂して『長城詩抄』一冊を刊行した。

鉄幹が長城に贈った漢詩は第六卷・第三号(大正十四年三月号)の『采花莊雜詩』の冒頭に七言絶句三首が収録され、長城からの贈詩に酬いた次韻の詩である。

發亥晚秋與羅馬尼駐劄公使堀口父子飲長城有詩、次其韻却酬、三首

發亥晚秋、羅馬尼駐劄公使の堀口父子と飲む。長城に詩有り、

其の韻に次し却酬す。三首

※癸

官場追暇共吟筵 公使風流誰比肩

(一)一

官場暇に迫んで 共に筵に吟ず、公使の風流 誰か肩を比べん

更喜君家公子在 龍蛇百變作長篇①

更に喜ばしきは君が家に公子の在り、龍蛇百變して長篇を作すを」

新歡如醋舊歡醇 昨是今非五十春

(一)二

新歡は醋の如く 旧歡は醇し、昨は是にして今は非なる五十の春

遊俠誰憐漢陽客 如今斑白講書人②

遊俠 誰か憐れむ 漢陽の客、如今 斑白 講書の人

偶會故人尋舊歡 災餘秋夕倍新寒

(一)三

偶たま故人に会いて 旧歡を尋む、災余の秋夕 新歡に倍す

陶然且假醉中夢 欲學圖南萬里搏

搏 搏

陶然とし且つ醉中の夢を仮り、図南の万里を搏つを學ばんと欲す」この三首の詩は、前稿にも第二次『明星』掲載の詩の例として挙げたことがある。長城からの三首の贈詩は未詳だが、大正十二年(癸亥1923)の晩秋、鉄幹五十歳、当時ルーマニア公使の長城、息子の大學

与謝野鉄幹と漢詩

の父子との三人で酒を酌み交わしたという。第一首は息子の大學を称え、第二首は再会を祝し、長城との最初の出会いが三十年前、朝鮮京城(ソウル)であったと注する。

自注：①長城の長子の大學 国詩を善くす、長篇縦横にして夙に盛名有り。②予長城と始めて朝鮮京城に于いて相識る、実に三十年前事に属す。

第三首は旧友長城の来訪に仮寝の夢の思いだが、大志を抱く長城を見習いたいと結ぶ。詩中に「龍蛇」「図南」などの詩語を用いる。ちなみに詩中の「三十年前」とは、明治二十八年(1895)十月に起きた、京城での閔妃事件と関わりがあるが、この件については稿を改めたい。なおこの年(癸亥)の翌々年、大正十四年四月(1923)に堀口九萬一はルーマニア公使を最後に外交官を辞している。

三首ともに、一・二・四句に押韻し、韻は、一：下平一・先。二：上平十一・眞。三：上平十四・寒。いずれも平声の韻である。

II 渡邊湖畔

(一)一・九・一一・一二・一三・一四・一五・一六

(二)一・二・三・四・五・六・七・八

《人物》のIIは渡邊湖畔であり、第二次『明星』所載の漢詩群の中で最も重要な人物であり、五十首のうち十三首が湖畔への贈詩である。本名、渡邊林平、金左右衛門。明治十九年(1886)七月一日(昭和十五年(1940)九月十六日歿。歌人・俳人。新潟県畑野町に生れ、小学校卒業後、美濃部楨(羽茂の人)について国漢を学ぶ。家業は呉服商、佐渡電灯会社社長に就任(三十歳)、十代から短歌に親しみ、『わかな舟』(山田花作主宰)の同人、「新潟新聞」(山田花作選者)にも寄稿している。大正十三年(1924)八月、昭和九年(1934)十一月の二度、與謝野夫妻を佐渡に招き生涯親密に交際した。高村光太郎や石井柏亭とも交流があり、昭和十年(1935)から「彰」の号で「東華」に漢詩を発表し続け、昭和二十年代から「古半」と号して俳句に転じ、実業家・文人として名が高かった。

「スバル」第六号（明治四十三年十月発行1910）に「鳥かぶと」（歌）が見える。第二次『明星』から投稿が本格的に始まり、第一巻・第一号（大正十年十一月発行1921）以来、最終の第十巻・第二号（昭和二年四月発行1927）まで作品を投稿し続けた。ただし漢詩の作品は全く見えない。

第二次『明星』終刊の後、翌年滿蒙旅行から帰国した鉄幹は、「旅行記」出版と同じ年（昭和五年1930）の三月に『冬柏』を創刊するが、漢詩二十首を掲載する。そのうち八首がやはり湖畔への贈詩である。なお湖畔は鉄幹が没した折に哀悼の漢詩を寄せている（『冬柏』第六巻・第四号）。

『明星』所載の湖畔に贈った十三首の中から幾首かの漢詩を選び次に挙げる。まず、一一・一二・一四・一五の詩は、長城への贈詩と同じ号に載せたものである。

今年正月十日、對雪書懷、寄渡邊湖畔養病在興津 （一）一一
今年正月十日、雪に対して懷いを書し、渡邊湖畔の興津に在りて病を養うに寄す

春遲驚未到 雪鎖半扉柴 薄酒纔成醉 貧廚自守齋
春遅くして 鶯未だ到らず、雪は半ば扉柴を鎖し
薄酒 纔かに酔いを成す、貧厨 自ら齋を守る
梅香寒裏醞 詩調苦中諧 忽憶嶽南客 夢飛煙水涯
梅香 寒裏に醞し、詩調 苦だ中諧

忽ち岳南の客を憶い、夢は煙水の涯に飛ぶ
正月十日、雪景色に對する感慨を詩に託し、静岡の興津（清水）で病氣療養中の湖畔に寄せた五言律詩で、詩中の「岳南の客」は湖畔を指す。偶数句に押韻し、韻は上平九・佳。

次の詩は、同じく静岡で療養中の湖畔の詩に對する和韻の詩を寄せた七言律詩二首の一である。

和湖畔興津養病雜詩韻却寄、二首

（一）一一二

湖畔の興津に病を養う雜詩の韻に和し却って寄す、二首
五十三年春又秋 人間何日脱窮愁

五十三年 春又た秋、人間 何れの日か窮愁を脱せん
吟成每與山妻詠 讀倦時同少女遊

吟成り 毎に山妻と詠ず、讀倦きて 時に少女と^{とも}に遊ぶ
自笑詩才如舊拙 誰憐世累及今稠

自ら笑う詩才旧拙の如きを、誰か憐れむ世累今に及ぶも稠し
嶽南春色遙相憶 松映晴波水有州

岳南 春色 遙かに相憶う、松は晴波に映じ 水に州有り
五十三の年齢、また一一の詩の「岳南」の語を再び用い、その地の

「春色」を「遙かに相憶う」と湖畔の身を氣遣う情が見える。一一・二・四・六・八句に押韻し、韻は下平十一・尤。一一・一二ともに平声の韻字である。

次の一四の詩は、『采花莊』に集った同人たちが「国風」（詩経）のことを議論しているのを聞き湖畔の詩の韻を用いて作ったという。

聽二三子論國風而有感、用湖畔詩韵

（二）一一四

二三子の国風を論ずるを聴きて感有り、湖畔の詩の韵を用う
曾擬鶴鳴于九臯 老來鷗意避風濤

曾て鶴の九臯に鳴くに擬す、老來 鷗 風濤を避くを意い
也無氣力能驅鬼 唯有形骸瘦似鰲

也た氣力無くして能く鬼を驅う、唯だ形骸の瘦なること鰲に似る
海内新詩何體好 京中舊友幾人豪

海内の新詩 何れの体か好からん、京中の旧友 幾人か豪なる
區區傭下是非語 自古詞權屬俊髦

區々たる傭 是非の語を下す、古より詞權は俊髦に属す
「九臯」「鷗意」など「經書」に関わる詩語を使っているが、實際

には中国の「經書」ではなく、日本の文学（和歌）の本質に関する議論であつたのだろう。七言律詩の格調高い内容であり、押韻は、一句

及び偶数句、韻は下平四・豪。

次の一五の詩は、詩題（序）に湖畔の贈詩を載せ、感想とともに歌壇の変遷また現状についての自身の思いを述べ、湖畔の詩に和韻した答詩を贈る。

湖畔所贈詩云。「詞園寂寞萎柴荊。大雅正宗獨屬卿。巨刃摩天人不識。自期千載布衣名。」語雖溢美不太當、又知己言也、顧當明治中葉、予年少氣銳、不省非才、附先師驥尾。敢唱國風之反正趨新、實屬卅年前事、今也詞壇新人如雲、其作競芳爭妍、而予衰殘殆不能復起、感慨無限、乃和湖畔韻以答

（二）一一五

湖畔贈る所の詩に云う、「詞園寂寞として柴荊に委す。大雅の正宗独り卿に属す。巨刃天を摩すも人は識らず。自ら千載布衣の名を期す。」語美に溢ると雖も太だしくは当たらざるも、又た知己の言なり、顧みるに明治の中葉に当たり、予年少にして氣銳、非才を省みず、先師の驥尾に附す。敢えて國風の反正趨新を唱うるは、実に卅年前の事に属し、今や詞壇に新人雲の如く其れ芳を競い妍を争うを作し、而して予衰殘して殆んど復た起つこと能わず、感慨限り無し、乃ち湖畔の韻に和し以て答う。

先唱歌壇關棘荊 奪來傳授屬公卿

先に歌壇に棘荊を關くを唱え、奪い來りて伝授するは公卿に属す

回頭三十年前事 猶有詩人記姓名

頭を回らせば三十年前の事、猶お詩人の姓名を記す有るがごとし
湖畔の詩は、今の歌壇の荒廢と衰微を歎き鉄幹一人が正当派であり、偉大な歌人の作を人は認識しないが、千載の後までも鉄幹の歌人としての価値を期待する、という。それに対して鉄幹は、賞めすぎだが知己の言葉でもあると述べ、自らの三十年來の歌歴を回顧する。今や無数の新人台頭の時代であり五十代の衰殘の身は再起不能で、記憶する人もあるか無しかだが、感無量の心情を湖畔の贈詩に和韻して答詩とした、という。贈詩・答詩ともに七言絶句であるが、詩題のなかに

与謝野鉄幹と漢詩

湖畔の贈詩を記すという形式は特殊な形式であり例を見ない。

詩の内容は、二十代の初めから歌壇のリーダーとして紆余曲折を経してきた今、我が姓名が残っているかどうか、という。和韻の詩なので、湖畔の七言絶句の一・二・四句の字、「荊・卿・名」をそのまま句末の字に用いている。下平八・庚の韻。

次の二六の詩は、第九卷・第三号（大正十五年十月号1926）所載の詩であり、五言律詩である。湖畔の書簡に返した詩である。

四疊韻贈湖畔

四疊韻、湖畔に贈る

（三）一二六

書自佐州至 知君俗累無 茶煎消悶綠 詩點會心朱

書は佐州より至り、君に俗累の無きを知る

茶は煎ず消悶の緑、詩は点ず会心の朱

秋意竹同冷 世途人共迂 近來何所學 曠達外如愚

秋意 竹と共に冷ややか、世途 人と共に迂る

近來 何の学ぶ所ぞ、曠達 外 愚の如し

佐渡から寄せられた湖畔の手紙に対して、自身の日常の閑適の境地を詠んだものであろう。韻は偶数句に踏み、韻は上平七・虞。

なお先に挙げた、二八の五言律詩も湖畔の贈詩に和（次）したものである。

こうした湖畔との応酬、贈答の漢詩が数多くあるのを見ると、この時期の鉄幹の漢詩制作の主軸が那邊にあったか自ずと知ることができそうである。

《人物》のⅢは吉田學軒である。

Ⅲ 吉田學軒

（三）一一九・三〇

吉田學軒、本名吉田増蔵、福岡県に生まれる。慶応二年（1866）一月二十二日（昭和十六年（1941））十二月歿。京都府稗田村にあった水栽園で漢学を学び、京都帝大撰科生となり哲学を学んで後、奈良女子高等師範学校教授を経て図書寮編輯官となった。大正十五年（1926）十二月、大正天皇崩御の際、宮内大臣から元号考案を命じられ、『書

与謝野鉄幹と漢詩

『経』の一節から「昭和」の年号を考案したと言われる。^①

鉄幹が吉田學軒と親しくなったのは第二次『明星』復刊の翌年に、長年にわたって與謝野夫妻を支援してきた森鷗外が亡くなり、鉄幹が『鷗外全集』の編輯主任となったところからであった。それ以来吉田學軒に師事し、再び漢詩を学び始めたのである。^② 學軒は鷗外によってその才能を見いだされた人であり、鷗外の晩年は特に親密な間柄にあった。二九・三〇の二首は、第二次『明星』の第九卷・第三号（大正十五年十月号1926）所載のものである。

呈吉田學軒先生 吉田學軒先生に呈す

（二）一八九

百家凋落後 夫子獨能振 超俗識兼德 立誠詩有神

百家 凋落の後、夫子 独り能く振るう

超俗 識德を兼ね、立誠 詩に神有り

道探九經典 學葆六書眞 相識廿年晩 五十欲問津

道は九經の典を探し、学は六書の眞を葆つ

相識ること二十年の晩、五十にして津を問わんと欲す

この五言律詩には師の學軒に対する真摯な漢詩制作の姿勢が実によく表れている。中国語学特に文字学の専門家であった學軒の学識に対して、「百家」「夫子」「九經」「六書」など過剰なまでの典拠ある語がちりばめられている。そして尾聯において「師を知るのが二十年おそかった、五十の年で『津』を訪ねようとしている」と、『論語』微子篇の「子路をして津を問わしむ」を用いて、学問の道探究と教えを乞う姿勢を示し吉田學軒に対する敬愛の情を表明している。偶数句に押韻し、韻は上平十一・眞。

次のもう一首の五言律詩は、師の學軒に贈呈と同時に友人たちにも示したもので、よき師よき友に恵まれた三十年の苦吟の人生を回顧している。

五疊韻呈吉田先生併似諸友

（二）一三〇

良師兼益友 相識世攸無 交賴諸君素 詩煩夫子朱

良師 益友を兼ね、相識 世よ無き攸

交は諸君の素を頼み、詩は夫子の朱を煩わす

苦吟卅年瘦 末學一生迂 猶作童兒問 同人憐我愚

苦吟 三十年瘦せ、末学 一生迂なり

猶お 童兒の問いを作すがごとく、同に人の 我が愚を憐れむ

晩年に漢詩を学んでも一生うだつはあがらず、子どもがものを尋ねるのと同じように我が愚かさを人は憐れんでいるようだ、と上達のま

まならぬ心情を吐露している。偶数句に押韻し、韻は上平七・眞。

學軒に先立つこと六年余り、鉄幹の死後三十五日の法要に、學軒は追悼の詩を寄せている。^③

○

以上、適宜に例となる詩をあげつつ第二次『明星』の鉄幹の漢詩について述べてきたが、前稿の『海内詩媒』の漢詩とはかなり質的に異なるものがある。十代の鉄幹は、日柳三舟主宰の漢詩雑誌の投稿者の一人であったが、これは自らが主宰者である雑誌に掲載したものである。したがって三十五年の空白が漢詩制作にどのように影響したかは論じがたいものがあるというのが筆者の正直な感想である。ただ十一人の子どもをかかえた大家族の中で、終生夫妻とともに仕事ができ、時に同人たちとの会合ももてる『場』（『采花莊』『遙青書屋』で第二次『明星』の編輯を行えたことなどから、実生活上また精神的余裕を生じたのが鉄幹の漢詩制作復活の一因だったのではなからうか。

またこの時期に最良の師吉田學軒、さらに二人の漢詩の好き友、堀口九萬一、渡邊湖畔との出会いは漢詩制作の復活に大きく作用したと言えるだろう。ただし後者の二人の漢詩をめぐる未解決の部分が多く、鉄幹との贈答詩はまだまだ資料不足の面が残されている。三十五年ぶりに第二次『明星』に掲載した鉄幹の漢詩は特殊ではあるが、裏付けとなる資料は皆無ではないので、更なる資料踏査によって解明

与謝野鉄幹と漢詩

できる面があることを筆者の今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 『海内詩媒』百三十四集。なお「瓶井山雜吟」は二首連作の詩で、もう一首は百三十集に見え、同年の四月十二日発行。

(2) 「与謝野鉄幹と漢詩 初稿」東海学園 言語・文学・文化第六号（平成十九年三月）。

(3) 明治二十三年、帝国議会が初めて開かれた年に詠んだ五言古詩がある。（『与謝野鉄幹伝』永岡健右著）

(4) 『明星』「一隅の卓」（第九卷・第三號・大正十五年十月）

我我夫婦は郊外に一昨年小さな読書室を建てて「采花荘」と名づけたが、此夏友人の厚意に由って増築し、初めて家らしいものが出来た。之は主として十餘人の子供を住ませて置くのであるが、我我は土曜日の夕方から日曜へ掛けて一泊することにしたと思つてゐる。「明星」同人の小集も今後は其處で催したい。その二階から秩父連山、富士、甲州の諸山、相模の箱根山脈までが西南に遠望されるので「遙青書屋」と名づけた。隣には戸川秋骨先生、愛曾先生、前田晃先生が生まれ、また付近には小野賢一郎、廣瀬哲士の二君が生まれてゐる。前田小野兩氏の外は皆慶應大學の同僚である。古い森が多くて空氣も眺望もよい所であるが、番犬を放し飼にしてゐる家が多いので、たまたま行く我我は其犬どもに吠えられて困る。十二歳の時に一度狂犬に咬まれて大きな疵をした自分は殊に其犬だけが不快である。廣瀬君に聞くと實際に狂犬も居て此夏は幾人かを咬んだので巡査が五六頭を殺したと云ふ事である。近刊の雑誌「隨筆」を読むと戸川先生も其犬に就て同様の所感を述べてゐられる。五十歳を過ぎてやっと初めて自分の家が出来たのも奇體な感じのものであるが、その家が出来た爲めに五十歳を過ぎて犬を怖がらねばならないのも皮肉である。

與謝野 寛

(5) 訓読は〇〇頁参照。

(6) この詩題の後に、『采花荘』『遙青書屋』についての序のような詩題が続いているが先に挙げたので省略した。〇〇頁参照。

(7) 堀口九萬一著・堀口大學譯『長城詩抄』父の漢詩・子の和訓』昭和五十年三月三日・大門出版。あとがきによれば、『長城詩稿』三卷、三百三十首の詩所収の中から、自在に九十九首を選んで訳した、とある。

(8) 『冬柏』所載の鉄幹の渡邊湖畔関係の詩。

第五卷・第五号……時事有感三用湖畔君來示詩韻。

第八号……雪後口占、四用湖畔君來示詩韻。○與湖畔君別遙有此寄。○疊韻酬湖畔君。

第十号……酬湖畔君次其寄懷韻。

第十二号……遙青書屋雜詩、用渡邊湖畔君寄懷韻。○遊佐渡國、宿渡邊湖畔君家、次主人所示詩韻。

第六卷・第三号……偶感、用渡邊湖畔君寄懷韻

(9) 哭與謝野先生

生芻青一束、肅奠代蘋蘩。撤瑟千秋恨、傳衣半夜恩。
音容唯入夢、影事暗銷魂。遺愛宜珍重、詩書手澤存。

(10) 第二次『明星』「一隅の卓」(第六卷・第三號 大正十四年三月)

一興津に滞在中の湖畔君が頻に漢詩を作つて寄越すので自分もそれに次韻したものなどが少しばかり溜つた。勿論拙劣極まるものであるが、吉田増藏先生の批閱を乞ひ得た分だけを此號の「雜俎」の餘白に載せて諸友の一笑に供へる。與謝野寛」

またこれによって、吉田増蔵（學軒）が鉄幹の漢詩の師であったことが知られる。

(12) 『冬柏』第六卷・第五号に、晶子は「寢園」と題して、

故人の五七日に吉田學軒先生より「楓樹蕭蕭杜宇天。不如歸奈何傳。讀經壇下千行淚。合掌龕前一縷香。志業未成眞可恨。聲名空在轉堪憐。平生歡語幾回首。舊夢茫茫十四年」といふ詩を賜りたれば、この五十六字を一つづつ歌に結びて詠める。

と、晶子も五十六字の漢字を入れた和歌五十六首を詠んでいる。

【明星第二次所載・鐵幹漢詩】詩題（●印は本文中に使用した詩）

(一) 采花莊雜詩 (第六卷第三號・大正十四年三月)

●發亥晚秋與羅馬尼駐劄公使堀口父子飲、長城有詩、次其韻却酬、三首

○甲子正月、遊南信雜詩、三首

○甲子八月、新潟行形亭席上作、二首

○拜眞野御陵、用同行渡邊湖畔詩韻、

○甲子冬日、輓種德堂主人三樹一平君、用主人所書明人詩韻

●今年正月十日、對雪書懷、寄渡邊湖畔養痾罪興津

●和湖畔興津養痾雜詩韻却寄、二首

●聽三子論國風而有感、用湖畔詩韻

●湖畔所贈詩云。「詞園寂寞委柴荆。大雅正宗獨屬卿。巨匠摩天人不識。自期千載布衣名。」語雖溢美不太當，又知己言也。顧當明治中葉，予年少氣銳，不省非才，附先師驥尾。敢唱國風之反正趨新，實屬卅年前事，今也詞壇新人如雲，其作競芳爭妍而予衰殘殆不能復起，感慨無限，乃和湖畔韻以答。

○茲二月十日、與同社諸子由橫須賀遊三浦三崎、投旅亭岬陽館、湖畔養病在興津、不能來會、寄到一詩、乃用其韻、却酬

与謝野鉄幹と漢詩

与謝野鉄幹と漢詩

○岬陽館即事

(二) 采花莊雜詩(第七卷第三号「新秋特別號」・大正十四年九月)

●頃者予借地于城西下荻窪、營茅屋、扁曰采花莊。莊無庭園之趣、唯任雜草繁蕪。而月兩三度乘閒而往。往則讀書、倦則詠歌、從朝至夕、悠然身在風塵之表、意興所會、偶有此作。

○畏友船越君政一郎、篤學能文、久在浪華、以著述聞、近患風疾舌、舌澁殆不能言。賦此以贈。

○八月十三日登碓氷嶺而作。

○今夏苦蚊殊甚、八月二十四日夜、困悶不能寐、因有此作。

(三) 遙青書屋雜詩(第九卷第三号・大正十五年十月)

○答湖畔問近・丙寅晚夏作

●郊西移居三首 用湖畔詩韻。丙寅初秋作

予曩卜地郊西。營小居。扁曰采花莊。頃者復構一樓于其側。題曰遙青書屋。以西南遠望 甲武相三州諸山也。

○四疊韻贈湖畔

●遙青書屋小集

●書屋口占 用湖畔所寄韻

●呈吉田學軒先生

●五疊韻呈吉田先生併似諸友

(四) 遙青書屋雜詩(第十卷第二号・昭和二年四月)

●余客臘來、以筆耕太忙、久不經過、此日來宿、書屋雪後、庭前梅花、開・二分、月色清妍、轉覺可愛、

○今年三月七日、我鄉丹後諸郡有大震、火災繼起、人多死之、慟哭之餘、爲賦一詩

○呈克堂若槻宰相五首、聞君有近日掛冠之志

○錄昨年中秋作

※①一八首 ②一二首 ③一三首 ④四首 ⑤三首 (①五言絕句 ②七言絕句 ③五言律詩 ④七言律詩 ⑤五言古詩)

※最近、渡邊湖畔に關して次の著書が出版され、詳細について筆者は未見だが、中に湖畔作の漢詩が何首か載せられている。『佐渡びとへの手紙―渡邊湖畔と文人たち―』上・中・下(三冊) 渡邊和一郎 平井印刷。(一九九九年十二月・二〇〇三年六月・二〇〇九年五月)

(四天王寺大学客員教授)

一七 ②

一八 ⑤

一九 ③

二〇 ③

二一 ⑤

二二 ③

二三 ③

二四 ③

二五 ③

二六 ③

二七 ③

二八 ③

二九 ③

三〇 ③

三一 ③

三二 ③